様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：２３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００２２４

研究課題名（和文）中空構造を持つ立体造形物の基礎研究と彫刻表現の実践

研究課題名（英文）Basic research on three-dimensional objects with hollow structures and practice of sculptural expression

研究代表者
芝山　昌也（Shibayama, Masaya）

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・教授

研究者番号：９０４３５２２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は江戸から明治期に盛んだった祭礼の「造り物」の造形性に着目することで、西洋近代美術の外に日本彫刻の根源を見出す研究である。「造り物」は毎年造り変えられる一時的な造形物であり、中空構造になっている。それらは近代彫刻の恒久的な構造とは異なり、江戸の見世物の「生き人形」と共通点が多い。そこで、人形師を多く輩出し、多くの「造り物」が継承されている熊本県を中心に実地調査を行った。それによって「造り物」に残された江戸の技術や再利用を可能にした素材の扱い方など、恒久性を求めないからこそ発展した日本なりの造形思考を把握することができた。その成果は研究紀要に投稿し、立体造形作品は芸術祭などで発表をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「造り物」の先行研究は進んでいる。本研究が先行研究と異なるのは、制作中の「造り物」を視察し制作工程を元に考察を進めたことである。「造り物」のなかには奉納の性格を持たずに、競技として発展してきた事例もあり、それらが新しい制作技術を育んできたこと明らかになるなど、彫刻の実作者だからこそ導ける見解もあった。明治期に西洋近代彫刻が定着していく過程で、籠細工などの一時的な造形物は忘れ去られてきた。本研究では、日本の手業が、現在も地方の祭礼に受け継がれていることが明らかになった。そこに着目した作品の制作は、恒久的な彫刻を軸にしている日本の現代彫刻の今日的な在り方の考察に寄与する可能性が高い。

研究成果の概要（英文）：This research attempted to find the roots of Japanese sculpture other than Western modern art by focusing on the formative qualities of “Tsukurimono” during festivals from the Edo to Meiji periods.A “tsukimono” is a temporary three-dimensional object that is hollow inside and is rebuilt every year.Unlike the permanent forms of modern sculpture, “tsukurimono” has much in common with the “ikinigyo” that were popular in the Edo period (1603-1868). Therefore, I conducted our research mainly in Kumamoto Prefecture, where there are many doll makers and many “Tsukurimono” are still being made today.The results were submitted to a research bulletin, and were also presented as three-dimensional works of art at art festivals and group exhibitions.

研究分野：現代彫刻

キーワード：現代彫刻　近代日本彫刻　江戸の造形　祭礼の造り物　インスタレーション　日本彫刻史　彫刻　立体造形

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

研究当初の背景

江戸から明治時代にかけて、人気を博していた籠細工や生き人形、西日本を中心に発展した祭礼の「造り物」には日本の手仕事から応用された多様な造形の技術が使われていた。それらは大衆文化として捉えられ、ヨーロッパの彫刻を基本とする明治の彫刻教育からは遠ざけられた。また、それらは一時的で簡易的な構造を持つものが多かったので、恒久性を求める近代彫刻には素材や技術の側面からも組み込まれることはなかった。研究者は現代彫刻の可能性を探るなかで、明治以前から親しまれてきた一時的な立体造形物を制作する技術や素材について研究を進めるようになり、それらの構造（骨組み）に「中空構造」が多く使われていることに着目するようになった。

研究の目的

本研究は「中空構造」を持つ立体造形の実地調査や歴史的検証・分析を通じて、江戸の庶民の手で造られていた立体造形物が現在においても継承されていること、高度な造形性が更新されていることなどを明らかにすることを目的とした。そして、近代彫刻の影で忘れられた高度な江戸の造形技術と造形性について考察するために、現在まで継承されている祭礼の「造り物」について焦点を絞り重点的に調査を行うことにした。焦点を絞った理由は二点ある。「造り物」の分布や伝播については先行研究が進んでいるが、制作や各団体の継承に関する研究が殆どみられなかった点と、全国各地の祭礼が社会情勢や人材不足により縮小する傾向が強く、現状の記録や分析を急ぐ必要があったという点である。

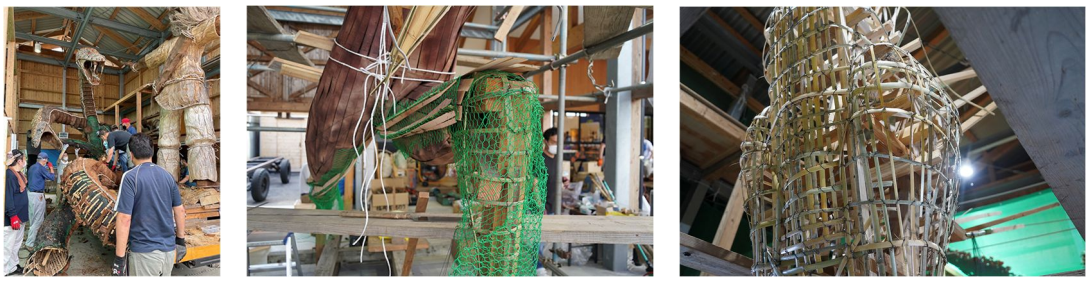
研究の方法

本研究は、各地に点在する「造り物」の現地調査や文献調査を行って、その制作方法や現況把握、周辺地域との比較を行う民俗学的研究と、それらの成果を基盤にして日本の古層をテーマにした彫刻作品の制作・発表を行う制作研究を並行して行った。

本研究のなかで現地調査を行った主な祭礼は以下の通りである。令和元年度「うと地蔵祭り」（熊本県宇土市）、火伏地蔵祭り（熊本県山都町）、八朔祭（熊本県山都町）、塚脇地蔵講（大分県玖珠郡）、大阪せともの祭り（大阪府大阪市）。令和 2 年度、令和 3 年度の 2 年間は現地調査を予定していたすべての祭礼が新型コロナウイルスの蔓延によって中止となった。令和 4 年度には規模を縮小して開催する祭礼も増えたが「造り物」の制作については中止する自治体が多かった。そんな状況下で「造り物」の制作をいち早く再開した八朔祭の「大造り物」の制作現場を中心に現地調査を再開した。令和 5 年度には九州以外の祭礼の調査を行い、山陰地方の「平田一式飾り」（島根県出雲市）を視察した。付随する調査は国立国会図書館や国立民族学博物館をはじめとした文献調査、各地の図書館の郷土資料、公民館等に残された資料から関係する文献を閲覧し分析を行った。また、「中空構造」を活かした彫刻作品の制作を行い、それらを芸術祭や展示スペースを中心に発表を行った。

研究成果

現地調査の成果は主に「近代日本彫刻考（二）―山都町の「大造り物」を中心にー」（令和４年度 金沢美術工芸大学紀要 67 号）に掲載している。その概要は、熊本県出身の伝説的人形師松本喜三郎の出自から始まり、若い松本が人形造りの技術を磨いた熊本市の迎町周辺の地域性に着目しすることで、熊本県内の街道沿いに様々な「造り物」が伝播し現存している要因を考察した。次に小泉八雲が記した「造り物」について言及し、その記述に残る地域の現状や類似する地蔵講についての見解を述べた。それから、熊本県内の「造り物」の実施状況を調査し、現況を掲載、また新型コロナウイルスの影響を受けた各地の実施状況について掲載している。以降は山都町の八朔祭の「大造り物」の現地調査について多くの写真を掲載し、その起源や「大造り物」が登場するようになった時期や起因について古文書を含む文献から導いている。次に現地調査の際に見聞した素材や制作方法、制作場所、引き継がれてきたテーマ性について詳しく分析している。また「大造り物」が発展する大きな要因となっている競技性について、歴代の順位を調査しながら述べている。また「大造り物」が完成に至るまでの制作方法を詳しく掲載している。



【「大造り物」の制作 】

作品制作の詳細は「中空構造による彫刻作品の展開」（令和 3 年度金沢美術工芸大学紀要第 66 号）に掲載した。本論文の概要は研究者が現地で調査した高森風鎮祭の「造り物」、うと地蔵祭りの「造り物」、前述の「大造り物」などの造形的な工夫を分析しながら、とくに素材の扱われ方について詳しく図版と共に記載した。それらの調査によって導かれた作品制作の手法を公開した。制作途中の写真や展示風景を掲載し、中空構造の作品の可能性について述べている。

【中空構造を用いた彫刻作品の制作と展示①】

【中空構造を用いた彫刻作品の制作と展示②】

まとめ

本研究は近代彫刻の黎明期の分析研究から派生した研究であり、立体造形物の構造や素材、技術に着目することで、日本の立体造形物のルーツを探り現代彫刻の制作に活かそうとした。研究を進めるにつれ「造り物」は地域の人々が、日常を忘れるかのように作ることに取り憑かれている様子も知ることが出来た。江戸から現代へと時間を経ても、造形物を作る喜びが地域に残っていることも明らかになった。その技術は基本的に口承で後世に伝わるものである。いくつかの「造り物」はいわゆる平成の大合併の時に自治体の変化によって姿を消していた。さらに過疎化、少子化で急速に「造り物」の数が減りつつあることも現地調査で実感した。本研究の期間を直撃したコロナウイルスのような伝染病の影響も少なくない。本研究をさらに発展させ継続的に記録する必要性を感じている。また造形芸術の新しい形として制作と発表を継続することも、現代彫刻の可能性の拡大に寄与することを実感している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 芝山昌也	４．巻 67
２．論文標題 近代日本彫刻考（二）―山都町の「大造り物」を中心にー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 金沢美術工芸大学紀要67号	６．最初と最後の頁 96,106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 芝山昌也	４．巻 66
２．論文標題 中空構造による彫刻作品の展開	５．発行年 2022年
３．雑誌名 金沢美術工芸大学紀要	６．最初と最後の頁 20,25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 芝山昌也
２．発表標題 隠れて、もう、みえない
３．学会等名 グループ展「すごもりむしとをひらく」
４．発表年 2021年

１．発表者名 芝山昌也
２．発表標題 野外彫刻「ここからは私たちのところ」
３．学会等名 美作三湯芸術温度（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 芝山昌也
２．発表標題 すでにそこには石も波も気配もあって
３．学会等名 金沢アートグミ13周年記念個展（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

金沢美術工芸大学学術リポジトリ https://kanazawa-bidai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=716&item_no=1&page_id=44&block_id=46 MASAYA SHIBAYAMA OFFICIAL WEBSITE http://shibayama.net 金沢美術工芸大学「すごもりむしとをひらく」 https://www.kanazawa-bidai.ac.jp/event/9053/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関